

1. そのころ、全世界の住民登録をせよという勅令が、皇帝アウグストから出た。これは、クレニオがシリアの総督であったときの最初の住民登録であった。それで、人々はみな、登録のために、それぞれ自分の町に向かって行った。(2:1-3)
  - a. イエスが生まれたのはオクタヴィアヌス（彼は皇帝アウグストゥスと呼ばれた）がローマ帝国初代皇帝になっていた時代であった。イスラエルはその統治下にあった。
  - b. 皇帝アウグストゥスは「世界に平和をもたらした聖なる救世主」と呼ばれた。古代の碑文には彼について「聖なるアウグストゥス、陸にあるもの空にあるものを治める皇帝、全世界の恩恵者であり救世主…」という記述がある。
  - c. このアウグストゥスのプライドから全世界の住民登録をせよという要請が出た（おそらく税金など帝国に必要なもののためであろう）。彼は全世界の支配者のように見えたが、こうした世界の動きの中で神の御手は確実に働いていた。
  - d. 今の時代にこれと同じことが起こったらどうだろう？ 世界中の人たちが同時にチケットを買い旅行の手配をし、確定申告をし・・・という混乱の中で人々は、一体神はどこにいるのか？という疑問を持つであろう。忠実なイスラエルの民もそのように考えたに違いない。
  
2. ヨセフもガリラヤの町ナザレから、ユダヤのベツレヘムというダビデの町へ上って行った。彼は、ダビデの家系であり血筋でもあったので、身重になっているいなづけの妻マリヤもいっしょに登録するためであった。(2:4-5)
  - a. ベツレヘムへの旅に出たこの貧しいナザレの若い夫婦もこの勅令に対してそのような思いをもったのではないだろうか。
  - b. 結婚前に子供ができたという噂が広まってしまったカップル。そしていつ出産が始まってもおかしくないのにベツレヘムに向けて80マイルも旅をしなければならなかった若い女性..... どう考えても良い状況ではない。
  - c. この旅がどんなに困難であろうと、これはミカ書5:2の預言が成就されるためであった。神の御心が成るためには、自分の都合が悪くなったり、思い通りに行かなかったり、人から良く言われなかったり（ヨセフはマリヤと一緒にすることでそれを断念した）などの代価を支払わねばならないこともある。しかしあなたが受ける恵みは、あなたが払う代価よりも必ず大きくなる。
  
3. ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。(2:6-7)
  - a. オクタヴィアヌスやクレニオが権力をふるっていた目と鼻の先で新しい日が夜明けを迎えていた。世界を救う真の救い主、神のひとり子が誕生し、粗末な飼葉おけに寝かされた。
  - b. この救い主の良き知らせは、主の御使いを通してまず夜番をしていた身分の低い羊飼いたちに知らされた。普通では考えられない状況の中で、最も価値がないような人たちに神は現れ、恵みの時代へと導かれる。
  - c. 飼葉おけしか寝かせる場所がないこの幼子がメシアだと聞かされたヨセフとマリヤはさぞかし困惑したに違いない。
  - d. 皮肉にもこの飼葉おけがメシア誕生の羊飼いへのしるしとなり、何世紀にもわたって人々はこのキリスト降誕の情景で家を飾り、メシア誕生を祝ってきた。
  - e. 神の御国ではへりくだることが大きな名誉となる。粗末な状況を見くびってはいけない。それを受け入れ、神は卑しい者をこそ高く引き上げられることを知ろう。